

海と月の迷路

プロローグ

かつては遊郭だった、九州N県N市、M町の高台に、その料亭はあった。戦前に建てられた建物は老朽化しているものの、いくつもの大広間と手のこんだ日本庭園が往時をうかがわせる。戦前には連夜の宴がもよおされ、帝国海軍の高級軍人や官僚、地元経済人が足繁く通ったものだが、翌年の取り壊しが決まっていた。

風情を惜しむ声は、地元を中心に少なからずある。だがバブル経済も終焉を告げ、観光資源とするほどの歴史的価値があるわけでもなく、逆らえない時代の流れといえた。

平成七年、三月、その料亭の広間で、ひとりの警察官の退職送別会がもよおされていた。

主役は、荒巻正史警視、N県警察学校校長である。荒巻は、N県S市の生まれで、十八歳でN県警に奉職し、四十余年の警察官人生に別れを告げようとしていた。

荒巻を知る同僚警察官は、いちように「物静かだが粘り強い」性格だと評する。警察学校卒業後、O署の警邏課をふりだしに、荒巻は多くの部署を経験し、N県警刑事部を経て警察学校校長に着任した。

N県警本部長の挨拶に続き、公安委員長の乾杯の発声で始まった宴会も終盤に入り、要職にある警察官の多くは、中座し退席していた。荒巻がそれを望んだからだ。

引退し、消えていく人間の送別のために、よもや警察業務が阻害されることがあってはならないと

というのが荒巻の考えで、形式的な会など必要ないとすら主張したほどだ。

それを翻意させたのは、N県警刑事部長の遠山警視正だった。遠山は、刑事部時代の荒巻をよく知る人物で、その夜も、しきりに「もうお気づかいはけつこうです」という荒巻の言葉に耳を貸さず、宴席に残っていた。

「俺は、荒巻さんに一人前の刑事にしてもらったんだ」というのが、遠山の口癖だった。

百人近くいた宴席には、三分の一ほどの人間しか残っていない。自然、広間の上座に集まり、荒巻を囲む形で酌み交わしていた。

取り壊しの決まったこの料亭で荒巻の送別会をやるかと提案したのは遠山だ。遠山は、同じM町の古い酒屋の次男で、料亭の女将とも幼馴染であったことから、気兼ねせず、深夜まで宴会をつづける許しを得ていた。

他の広間の宴席は終わっている。

従業員を別にすれば、料亭に残っているのは、荒巻の送別会の出席者だけだった。

それほど上戸ではない荒巻は、勧められる酒にときどき口をつけるだけで、思い出話に花を咲かせる後輩のやりとりをにこにこしながら聞けばかりだ。

にもかかわらず、遠山を始めとして三十人近い人間が席を立とうとしないのは、荒巻の人柄といえた。

そこには、警察学校の卒業生で、三十になるかならないかという、若い警察官も数名いた。そのうちのひとり、二十八の若さで県警捜査一課に抜擢された馬場という刑事が、荒巻の正面に正座した。「自分は校長に教わったことを一生忘れません。まがりなりに刑事の端くれになれたとは、校長のおかげです」

感激屋で、酔いも手伝ってか、目を赤くしている。荒巻は微笑み、手をふった。

「何をいいよるか。馬場くんが捜一にひつぱられたとは、君が優秀だからに他ならん。もっと自分に自信をもったがよか」

「荒さん、甘やかさんでください」

遠山が割りこんだ。酒屋の息子だけあって、十本近く銚子を空けていたが、みじんも酔ったようすはない。

「こいつはまだ、尻尾もとれんようなおたまじゃくしです。捜査のことなんか何ひとつわかっちゃらん」

「誰だってそういう時代はある。失敗や試行錯誤をくりかえして一人前になっていく。ただ警察官には、許される失敗と許されない失敗がある。そこを常に考えて仕事にあたらなければならぬ」

荒巻の言葉を聞いて、宴席が静かになった。

誰もが「許される失敗」と「許されない失敗」について、思索する顔になっていた。

遠山が口を開いた。

「荒さん、あの話をこいつらにしてやってくれませんか」

居ずまいをただしている。

「あの話？」

「ほら、H島での」

遠山がいうと、荒巻は、わずかに顔をゆがめた。後悔と追憶の混じった、切なげにすら見える表情だった。

「他ではしとらんとでしょう」

遠山は荒巻の顔をうかがった。

「しとらね。忘れたわけではないし、忘れようとしても忘れられんことだしね」

いって、荒巻は膳の上におかれた盃を手にとった。冷えた燗酒で唇を湿らせ、わずかに間をおいた。

「もう、三十六年も前のことだ。馬場くんはまだ生まれてないな」

「影も形もありません。親父とお袋が、まだ出会つとらんかもしれませぬ」

馬場が答えた。

「三十六年前というと、校長は、二十四ですか」

別の教え子で、交通機動隊にいる巡査が訊ねた。

「そう。君と同じくらいだ、矢野くん」

荒巻はいった。卒業生の名前と顔、期をすべて覚えているのだ。

「どんな警官だったのですか」

矢野がにじり寄って訊ねた。銚子を手にしている。

「いや、大丈夫だ」

酒を断り、荒巻は黙った。眼鏡の奥で、そこにはない何かを目が追っていた。

「君らよりもはるかに世間知らずで、周りが見えていなかった」

「独身だったんですか」

荒巻は頷いた。

「ひとり者だ」

「H島って、あの島ですか。今は廃墟になった炭鉱の」

馬場がいった。

「そうだ。今は人っ子ひとりいないが、かつてはあの小さな島に五千人以上の人が暮らしていた」

「そげんですか？ 自分は船から見たことがあります、すごく小さか島じゃなですか。ぐるっと

回っても千メートルかそこらしかなかごたる」

矢野が驚いたような声をだした。荒巻は矢野を見やり、微笑んだ。

「君は、鹿児島島の出身だったな。知らないのも無理はない。だが本当に、今は壊れた建物しか残つたらんあの島に、かつては五千人からの人が住んどった」

「すごい人口密度じゃありませんか」

「あの島の人口密度は、当時香港をも抜いて、世界一といわれていた」

「世界……」

「そうだ。H島に住む人は、すべて何らかの形で、あの島の地下千メートル以上に掘られた炭鉱とかかわっていた。小さな島だが、そこには立派な病院もあったし、役場の支所も小中学校もあった」

荒巻がいうと、

「交番もあつたのですか」

矢野が訊いた。

「派出所だ。当時は、〇署T町H島派出所といった。二名の警察官が常勤しとつた」

「校長はそこに勤務しておられたのですか」

荒巻は頷いた。

「昭和三十四年、四月、派出所勤務を命じられた。それまでは大所帯の〇署の警邏にいたから、ひどく心細かったのを覚えている。炭鉱の島ということで、気の荒い人たちに囲まれて暮らすのじゃないか。たつた二人しかいない派出所で大丈夫なんじゃろうか、とね」

「想像がつかないです。港からすぐの場所ではありませんでしたけど、島は島ですよ。そこに五千人からの住人がいて、二人きり。何かあつても本土にすぐ応援を頼むというわけにはいかんでしょうし」

馬場がいった。

「港から西へ一八・五キロ。定期船で一時間少しかかった。石炭の産出が始まったのは江戸末期だつ

たそうだが、明治時代に本格的な炭鉱としての操業を開始し、昭和四十九年に閉山するまで、国内でも有数のいい石炭を掘っていた。私が着任したのは、まさにH島の全盛期だった。二十四時間、三交代勤務の鉱員たちがヤマに入つて、石炭を掘っていた。島は、あとからあとから継ぎ足すように建てられたアパートが迷路のようで、鉱員の生活にあわせるから、ひと晩中、明かりが消えることはなかった。海上に、こうこうと光の点つた窓が並んでいて、それが決して消えることがない。島の形ともあいまつて、『軍艦島』と呼ばれるようになった。いくまでに、あるていど島のことを勉強していったつもりだったが、実際にそこで生活してみると、まるで本土とはちがうことばかりやった」

荒巻は言葉を切った。盃に手をのぼし、それが空であることに気づく。矢野があわてて酌をした。今度は断らずに、酒を受け、荒巻は口に運んだ。

「忘れられんね。あの島のことが必要れば、私のその後は、まるでちごつたらう」

第一章 棧橋

N半島の北西に深く入りこんだ入り江にある大波止を出航した夕顔丸は、心配していたほどには揺れず、私はほっとしていた。

夕顔丸には、明らかに商用で島に向かうと思われるモンペ姿の婦人が多く乗りこんでいる。彼女らは野菜類や日用品などをくるんだ大きな風呂敷包みをかたわらにおき、お喋りに余念がない。どうやらT浜あたりからきているようだ。

天気はよいが、風のやや強い朝だった。署の独身寮を朝六時にでていくとき、「天気晴朗ナレドモ浪高シ」という言葉がふと頭をよぎったほどだ。

航程は一時間二十分ほどだと聞かされている。

私は制服ではなく一張羅の背広を着ていた。風呂敷包みをかたわらにおいたかつぎ屋の婦人たちの視線が痛い。背広姿で島に渡る人間が、そんなにも珍しいのだろうか。

航程の半分を過ぎたあたりで、最初の寄港地であるT島が視界に広がってきた。島のあちこちに立つ煙突から吐きだされる煙がま横に吹き流されている。

T島は、私の赴任地であるH島よりはるかに大きな島で、標高のある北側の丘陵地には濃い緑が繁っている。それに比べこれから向かうH島は「緑なき島」と呼ばれている。十一年前、私が十三のときに公開された映画の題名が、その由来だ。山村聰と佐野周二がでていたというのは知っているが、私

は観ていなかった。当時はエノケンの喜劇映画に夢中だったからだ。

T島の船着場で、多くの乗客が夕顔丸を降りていった。だがかつぎ屋の婦人たちの大半は船に残っている。彼女らの行先も、どうやら私と同じH島のようなのだ。

T島を離れたあたりから、船の揺れが大きくなくなった。海がシケてきたというわけではなく、外海に近くなったからだろう。

私は署にあったN県の地図を思い浮かべた。H島は、N半島突端から五キロほど北の沖合いに浮かんでいて、東寄りの最も近い綱掛岩からも同じくらい離れている。陸地からわずか五キロで、絶海の孤島と呼ぶわけにはいかないだろうが、たった五キロでも角力灘と呼ばれるこの海域の波は荒い。

船酔いから逃れるには、動かぬ陸地を眺めることだ。

私は進行方向左手に見えるN半島の景色に目をこらしていた。船の揺れはどんどん大きくなり、波を登っては降りていくようだ。登っているときはまだいいのだが、降りるときの体がすつと下がるような動きに、胃袋だけが胸のあたりにとどまっているようで、むかつきをもよおす。

かつぎ屋の婦人たちはすっかり慣れているのか、お喋りをやめるようすはまるでなく、それぞれるか干しイモらしきものをわけあって食べている。

そのように吐きけがこみあげ、あわてて私は目を陸地に戻した。彼女らがあれだけ平然としているのは、この揺れが決して過度なものではない証しなのだろうと、自分を慰める。

いよいよ、我慢できなくなったら便所に駆けこむか、手近の船べりから身を乗りだす他はない。だが着任早々、船酔いで青ざめている自分を、先任者は笑うだろう。

先任者は、岩本三郎巡査で、夫人ともどもH島に駐在している。私は同じO署の後藤巡査の交代員として、二年の任期でH島に赴任することになっていた。

岩本巡査は、私に先行すること一年半と聞いていた。夫人を帯同しての派出所生活というのは、い

つたいどんな暮らしなのだろう。

ひとりぼっちで赴任するよりは、はるかに仕事に専念できる環境といえるかもしれないが、果たして心細くはないのだろうか。

H島を所有しているのは、M菱という、旧財閥系の鉱山会社だ。今でこそ民主経営がおこなわれているだろうが、戦前は「鬼が島」と呼ばれるほどの厳しい労働環境で、荒くれの流れ者すら音をあげて過酷な作業を炭鉱で強いられたいらしい。たまりかねて島から脱走するのを島では「ケツ割り」と呼び、見つかるまで連れ戻されて、厳しい折檻せいかんを加えられたという。

もちろんそれは昔の話で、今は労働組合もあり、会社側と労働条件の交渉もされていると聞いている。まさにそのあたりの変化が、映画「緑なき島」で描かれていたのだとは、知っていた。

とはいえ、炭鉱の島なのだ。気の荒い鉱員もいるだろうし、怪しげな流れ者だって渡ってくる。気の休まる日はないのではないか。

私はひとりで想像していた。

不安な想像をめぐらせることが、結果船酔いの悪化を防止したのだから、皮肉な話だ。気づくと船が減速し、正面にH島らしき存在が見えてきた。

これを島と呼んでいるのか。H島のほぼ全容が見渡せる距離まで近づいたとき、私は思わずにはいられなかった。

島とは、通常、水面から隆起した、土や岩のかたまりである。そこに人が生活する家があったり、船の着く港が作られているものだ。ついさつき寄港したT島もまさにそういう形状だった。

だが眼前に近づくH島は、私がかつてに見てきた島とはおおよそ異なっていた。

まず土も緑もない。いきなり海中から隆起した切りたつた台座の上に、窓が縦横に並ぶ建築物がいくつもいくつも、ひしめきあうようにたち並んでいる。

これほど多くの高層建築物を一度に目にするのは初めてだった。東京は知らない私だが、博多にさえ、こんなにいくつもの高層建築はたち並んではいないだろう。

島の台座は積みあげられた石垣やコンクリートの護岸だった。浜といえるような浅瀬はどこにもない。さらに大きな櫓かぶたがそびえていて、巨大な触手のようなベルトコンベアが海に向かってつきだしている。

島というより、小さな工業都市がいきなり海中から浮かびあがったようだ。しかも、今離れてきたT島と比べても、本当にちっぽけなのだ。

目測で、左右は五百メートルあるかどうかといったところだろう。奥行きは百五十メートルを少し超えるくらいか。

この島をかつて新聞が、戦艦「土佐」に似ているから「軍艦島」と呼んだと聞いていたが、それもその筈はずで、軍艦なみの大きさしかない。

ここに鉱山会社の社員、鉱員、その家族をあわせて五千人近い人が住まわっているのだが、どうして、それだけの人が暮らせるほどの広さがあるとは思えなかった。

いったいどういう構造になっているのか。私はただあ然として、近づくH島を眺めていた。

正面に広がる島の、中央からやや左手に、コンクリート製で屋根のないあずまやあずまやのような構造物があつた。

あずまやは海面から二メートルほどの高さに浮かんでいて、そこに島からのびる長い腕うでのような棧橋がさしこまれている。

前進、後退をくりかえしながら船は棧橋に近づいていった。その操船が、入り江の奥の波止場に横づけするのは比べようもないほど困難であるのは明らかだ。

今日ていどの風や波でも、それなりの技術を要するのには、低気圧で海がシケれば、まさに困難を極めるにちがいない。

私は固唾を呑む思いで、船が棧橋に着くのを見つめていた。棧橋の先端には職員らしき男たちが立ち、船からロープが投げられるのを待っている。

舷側に立つ船員が投げたロープをすばやく拾いあげると、棧橋にしばらくつきた。ようやく、接岸したのだ。と、思うまもなく、身の丈の半分近くもあるような風呂敷包みを背負った婦人たちが続々と棧橋を渡って上陸を開始した。

私にとつては驚きの光景でも、ここで生活の糧を得る人々には日常に過ぎないのだと、あらためて思ったことだった。

棧橋のつけ根、島の上陸地点には、舞台のような護岸が二段あり、そこに出迎えや乗船を待つ者が並んでいる。

その中に、見慣れた制服を見つけ、私はほっと息を吐いた。先任者である岩本巡査が迎えにきてくれたようだ。

棧橋は、島に近づくとつれ、海面からその距離を増している。島の護岸は、海面から二十メートル近く高くつきでているのだ。それはすなわち、ひとたび海が荒れば、押し寄せる波がその高さにまで及ぶということをあらわしていた。

現に私が渡っている棧橋は二代目で、初代は三年前の台風で消失し、これは昨年完成したばかりだという。

岩本巡査は、私より十歳上、と聞いていた。三十四になる筈だが、ほっそりしているのと丸い眼鏡のせいで、もっと若く見えた。

かたわらにM菱のマークの入った帽子をかぶった男が立っている。こちらは五十くらいだろうか。

日に焼け、やけに眼光が鋭い。

男の視線は、棧橋を渡り、島に上陸する者すべてに注がれていた。菜っ葉服のような制服の袖に「外勤」と書かれた腕章を巻いている。

腕章の男の視線が、棧橋を渡りきった私にも向けられた。そのときになってようやく、私は自分が背広姿であったことを思いだした。

「岩本巡査」

私は声をかけ、敬礼した。岩本巡査は驚いたように眼鏡の奥の目を広げた。

「荒巻君か」

「はい。荒巻巡査であります」

同階級とはいえ、年齢も経験も自分より上の岩本巡査に、私は自然に敬語となった。

「ご苦労さま」

岩本巡査は微笑んだ。かたわらの腕章の男を見やった。

「関根さん、彼がそうです」

「おお」

関根と呼ばれた男は頷き、今度は値踏みするような視線を私に向けた。どこか横柄さを感じさせる。「あとでゆっくり紹介するが、こちらは会社の外勤係をしておられる関根さんだ。島のすみずみまで目を配っている人だから、わからんことがあれば訊くとよか」

岩本巡査の言葉に、私はわずかだが違和感をもった。確かに新参者なのだから、土地に精通した人の助言は大切だろう。しかし、それ以上に、岩本巡査の口調にはどこかおもねるような響きがあった。

「あなたのことは岩本さんから聞いたとるよ。挨拶がなかったら、こつちが声をかけようかと思つちよつた」

関根はいった。意味がわからず、関根を私は見つめた。すると岩本巡査が、栈橋の陸側を指さした。「あれだ」

そこには大きな看板が立っていた。

「告 外来客は必ず海岸玄関の外勤係に届け出て許可を受けて下さい。無断入島者に対しては即刻退島してもらいますので御承知おき願います」

「なるほど」

私はつぶやいた。

「この島はね、大きな家族みたいなものなんだ。無断で上陸するようなのは、ろくでなしと決まってる。だから私らのようなのが目を光らせておるんじや」

関根は胸を張っていった。それはどこか、警察官すら見下すような権力を感じさせるものいいだった。

私のその気分を感じとったのか、岩本巡査がいった。

「ま、とにかく派出所のほうに案内しよう。ここは君が今までいた任地とはまったくちがう。そういうたことにも早く慣れてもらわんと」

「はい」

私は頷き、足もとにおいていた荷物を手にした。

「じゃ、関根さん、あとはお願いします」

「はい。ご苦労さん」

関根は尊大に頷いた。

岩本巡査は歩きだした。

「居住区に行くには、まずここをくぐらんなばならん」

崖壁ぞいにトンネルが口を開けていた。岩本巡査につづいて足を踏み入れた私は、暗さにとまどった。湿ったコンクリート特有の薬品くさい匂いが鼻にさしこんだ。しかもトンネルはまっすぐではなく、大きく右に折れ曲がっていた。照明は、ところどころに蛍光灯があるだけだ。

ここをどうしても通らなければならぬとするなら、ひったくりや痴漢が頻繁に発生する現場になるなど思い、待てど私は思い直した。

ひったくりや痴漢の犯行をしても、この島からは決して逃げだせない。つまりすぐにつかまってしまふということだ。

この島が、外来者が簡単にいききできるところでないのは確かだ。かつぎ屋の婦人たちだつて夕刻には船でひきあげるだろうし、それにしたつて関根のような監視役には顔なじみばかりだろう。

見知らぬ者がいたらだちに怪しまれる風土なのだ。

そう考えると、私は少し気楽になった。互いが互いを知っている土地では、重大犯罪は起こりにくいだろう。流しの強盗などは、およそありえない土地というわけだ。

「長いですね」

私がいようと、声が反響した。

「二百五十メートルあるよ。なぜこのトンネルがあるかといえば、選炭場や捲き揚げ機がこの向こうにあるからなんだ。トンネルがないと、炭鉱の作業場を通っていくことになる。邪魔になるし、何より事故が起こりかねない」

岩本巡査は応えた。

不意に目の前がひらけた。大きな七階建てのアパートがそびえ、そこから右の方角に、給水塔の立つ岩の丘が見えた。その丘にも何棟もの建物がある。

「この大きいのが30号棟だよ。口の字型をしていて、大正五年に建てられた」

「大正五年ですか」

私は驚いた。そんな時代に、東京でも博多でもなく、海に浮かんだこのちっぽけな島に七階建ての大型アパートが作られていたとは。

「今ある中では、最も古いアパートだね。それでも百四十戸の住人がいる。住んでいるのは鉱員と下請け労働者とその家族だ」

それは巨大な長屋だった。各戸の玄関は引き戸で、桶やバケツが前に積み上げられ、洗濯物を吊るした物干し竿がそこら中にかかっている。割烹着を着けた婦人や、子供をおぶった母親が忙しげに通路をいききしているのが見えた。

アパートというと瀟洒な響きがあるが、実際は生活の匂いで満ちていた。まだ学齢に達していない幼な子の叫び声や泣き声、下駄を鳴らして走り回る音が、そこから降ってくる。

しかもこのアパートの通路は、島の中央部の岩の丘と直接つながっているのだ。高低差を巧みに利用した構造だった。

が、眺めているうちに私は気づいた。この小さな島には、人や資材を運ぶための通路を作る余裕などない。よく見ると、こうした渡り廊下のような通路は、そこいら中の建物と建物のあいだに渡されていて、密集した高層住宅を、少しでも住みやすくしようという工夫の表れなのだった。

それはまさに迷路で、これは容易ならぬところに来てしまったと、私は痛感した。小さな工業都市のように見えた島には、見渡す限り共同住宅が蝟集し、そのすきまだけでなく空中を通路や階段が結んでいる。この地理をすべて頭に詰めこまない限り、とうてい派出所勤務はつとまらない。

岩本巡査は30号棟を左に回りこむ通路を進んだ。正面に、もう海が見えた。私を乗せてきた船が着いた側とは反対の護岸がすぐそこにある。

船の上からではわからなかったが、H島もやはり、中央部が隆起した、島本来の形をしてはいるのだ。隆起をすべて建物がおおっているため、全体には林立しているようにしか見えないが、こうして上陸するとはつきり地形が理解できる。

岩本巡査にしたがって、護岸ギリギリに建てられたくの字型の六階建てのアパートの内側を私は進んだ。

「ここが31号棟。鉱員住宅だが、郵便局と共同浴場がある。共同浴場は61号棟にもあって、どちらも使っていることになった」

岩本巡査はいったが、その61号棟がどの建物なのか、私にはわからなかった。

「いったい、この島にはいくつ共同住宅があるんです？」

「病院や体育館までをいれると、70号棟まで、ここにはある。他に、トンネルの向こう側には下請け住宅もある」

「住民は何名ですか」

「昨年の人口調査では五千百五十二人の住民が登録されている。今年はそれよりさらに増える見通しだよ」

「まだ増えるのですか」

私は思わずつぶやいた。こんなところは日本中、いやもしかすると、世界中どこにもないかもしれない。

「隣のI島より、この島の貯炭量はまだまだ豊富だと見られている。しかも他の炭鉱に比べると、ここははるかに住みよいとされているのだよ。なぜなら、ここに住む者は、家賃、電気料金、水道料金、プロパンガス料金、すべてあわせて月額十円で暮らしているけんね。その上島内の商店は、会社側の負担で、生活必需品の大半が、本土よりも安く買えるんだ」

その口調は、H島を誇っているようにも聞こえた。

「さすがはM菱ということじゃないかな。島をでていきたい者より、ここで働き、暮らしたい者のほうが多かよから」

私は黙って頷く他なかった。ひとつの地域が丸ごと一企業の所有物である以上、その企業に対し、反感や違和感をもつ者が暮らしてはいけないのは自明の理だ。

しかし公務員である岩本巡查までもが、企業を賛美する言葉を口にするのは妙な気がした。おそらくその気持ちも、さっきの関根というM菱の社員に対する態度にも表れているのだ。

小さな児童公園があった。

わずかだが、それに私はほっとするのを感じた。ここに暮らしている子供たちが、いったいどこで遊んでいるのかが気になり始めていたのだ。

「公園ですね」

「もつと大きいのが、この先、65号棟の中庭にある。さつ、あれが派出所のある21号棟だ」

岩本巡查がみつつ先の建物を指さした。五階建てのコンクリート住宅だ。

「ちょうど手前にある22号棟が、君が今夜から寝ることになる公務員住宅だ」

あまり巨大な建物の中に派出所がないことに、私は少し安堵した。

気づくと、栈橋で船を降り、トンネルを抜けてからこつち、日のあたらぬ、谷底のようなところばかりを歩いている。

空をふり仰いで、私は栈橋が島の東側であったことに気づいた。つまり、H島は南北に長く、東西に狭い、長方形に近い形をしているのだ。

しかも中央部の岩の丘に林立する建物が、東からの日ざしをほぼさえぎっている。島内でも日が当たるのは、各建物の屋上か、岩の丘の上にある建物くらいのもだろう。

今夜から私が住むことになる公務員住宅は、その点では立地に恵まれているといえた。朝日はささないかもしれないが、中天の日と西日はうけることができそうだ。

派出所は、21号棟と教えられた建物の北側の角にあった。手すりのついた低い階段があり、登ると、ガラスのはまった引き戸がある。

引き戸の上の天井には、赤い丸電球がはまっていた。

「O警察署 T町 H島警察官派出所」と記された木板が掲げられている。

「さあ、着いた」

引き戸を開け、岩本巡查はいった。執務机の向こうの壁に、島の地図が貼られていた。私は思わず歩みよった。

それによると、この派出所のある21号棟は、島の南北ほぼ中央、やや西寄りに位置している。

地図には島内にたつ建物と番号がすべて書きこまれていた。さらに島の東側、鉾山部分の主だった施設についても記されている。

「そう。まず、地理を覚えなと。警邏の仕事はそこからだ」

岩本巡查の言葉に、我にかえった。

派出所の中を見回し、木製の留置場があることに私は気づいた。外からは仕切りの壁しか見えないが、内部に入ると格子のはまった出入口が設けられているとわかる。

「留置施設もあるんですね」

「それはそうだよ。船の最終がでてしもうたら、朝まで被疑者を送致できんからね」

「重大事件の発生は多いのでしょうか」

「いや。事件らしい事件など、ほとんどなか。私が着任してから、ここを使ったのは酔っぱらいの保

護くらしいものだ」

「傷害とか窃盗などの発生も皆無なのでどうか」

「島全部が家族のようなものなんだ。人のものをとったりしたら、ここで暮らしていけんよ」
制服のポケットから煙草をだし、マッチで火をつける。

「吸うかね？」

しんせいの袋を私にさしだした。

「今はけっこうです。しかし鉦員など、気の荒い者もいると思うのですが」

「喧嘩はある。特に酒が入っていれば、殴り合いになることもあるようだ。だがたいいのもめごとはここまでちこまれない」

岩本巡査は真面目な表情になった。

「16号棟の一階でカタがつく」

「16号棟の一階？」

「さつき会った関根さんを始めとして、外勤係が詰めているところだ。ヤマの人間にはヤマの人間のしきたりや掟がある。それにしたがって処理される。喧嘩なども遺恨を残さんように、手打ちをさせるようだ。そこに私らが、傷害だの何だのといって首をつっこめば、かえってややこしいことになってしまう」

「そう、なのですか」

私は腑に落ちなかった。

「荒巻巡査」

岩本巡査は口調を改めた。

「君が納得のいかないのもわからない。が、ここは地形だけでなく、あらゆることが他の土地

とはまったく異なる場所なのだ。たとえば、炭、炭、炭ですら、ここには手をださんでおる」

炭、炭とは、炭、炭労働者の組合のことだ。労働組合の活動に対する監視も、警察官の職務である。

「炭、炭が手をだせない？」

私は訊き返した。漠然とではあるが、鉦員の島である以上、労働組合の力は強いだろうと思っただからだ。

岩本巡査は頷き、声を低くした。

「炭、炭で働く者の組合には、炭、炭や全炭、炭といった組織がある。だがどの労働組の執行部も、ここにはオルグを入れていない。住んでいる組合員に対しても教宣活動をおこなわないよう指示を与えている。労働組どうしの方針対立や、組合、反組合で、島の空気が険悪になるのを避けるためだ。万一、闘争になれば、島が二分してしまう。そんなことは誰も望んどらん、というわけだ」

私は頷いた。確かに小さな島の中で組合闘争や労働争議がおれば、収拾は容易でないだろう。

「労働組すら手をださない土地柄では、我々警察官といえども、できることは限られてくる」

私は息を吐いた。

「この地図を見たまえ」

岩本巡査は煙草を灰皿に押しつけ、壁の地図に歩みよった。

「これはあくまでも平面図だ。縦にこの島を見ると、大きく四つの階層に分かれている。住居の高さと島での地位は比例していると思っ正しい。中央部の一番高いところにあるのが、鉦長の社宅だ。島で唯一の一戸建てだよ。さらに一級、二級、三級、四級に分かれる職員の住宅がある。一級が3号と56号棟、二級が2号8号12号14号21号25号57号、三級が8号9号11号14号21号57号、四級が21号」

私は地図を見つめた。隆起した岩の丘に並んでいる住宅は、M菱の社員である職員と公務員の住宅ということになる。

「公務員住宅は22号棟だ。ここは我々の他に、役場職員、小中学校教職員、郵便局員とそれらの家族が住んでいる。鉱員住宅はその下で、一級鉱員が31号48号59号60号61号65号、二級鉱員が31号65号、三級鉱員と四級鉱員が16号17号18号19号20号30号65号となっている。鉱員の階級はその仕事ぶりを経験で決められる。階級が上がれば、住むところも新しい建物の高い階に移れる、というわけだ」

「その下は何ですか？」

私は訊ねた。四つの階層というからには、もうひとつなければならぬ。

「商業関係者と下請け労働者の住宅だ。商店は57号棟に集まっているので、その地下に五十人近くが住んでいる。下請け労働者は、30号棟の一部と103号棟のプレハブ住宅にいる。下請け労働者と商業関係者をあわせても三百人くらいだ」

それがこの島で一番低く、日のあたらぬ場所で暮らしている人々だ。

「それだけ多種多様な人間が、せまい場所に住んでいるのだから、もめごとが起きないわけではないだろうという顔だな」

岩本巡査はいつて、執務机の上におかれていた紙ばさみを取りあげた。

「これを見ろといい。この島の生活管理の仕組みだ」

そこには「各区分」とあって、一区から十六区まで、各棟各号室が細かに書きこまれていた。

「島内は階層別に五十戸から百戸単位で区分けがされていて、それぞれに区長がいる。区長の上は外勤係、その上が会社の総務課だ。各棟の社宅管理、生活指導、ノソソポ対策をおこなう」

「ノソソポ対策？」

「鉱員のずる休みのことだよ。所帯もちの鉱員はそうでもないが、独身で寮暮らしをしている鉱員は、仕事をずる休みがちだ。もちろんそういう人間はいつまでたっても上の住宅には住めないが、ずる休みが多くなれば鉱員全体の士気にかかわるし、ヤマそのものの稼働率も悪くなる。外勤係はそうい

うのを防ぐためにも島内を巡回している」

「自治組織が確立されているということですか」

関根の横柄な態度を思いだした。

「外勤詰所には受信専用電話があって、各住戸の共同電話からすぐ通報できるようになっている」

「一一〇番は意味がないのですか」

「島に個人用の電話はない。公衆電話だけなんだ。一一〇番をして、県警本部からここに通達かくるのを待つくらいなら、外勤係に通報したほうがはるかに早い。したがって、我々は外勤係と密に連絡をとらなければ、職務の遂行に支障をきたすということになる」

私は納得せざるをえなかった。この島では警察官といえども、鉱山組織の一部なのだ。

「住宅と炭鉱以外の施設には何がありますか」

「まず病院がある。それに保育園、小学校中学校。さらに寺と神社」

岩本巡査は地図を指でおさえた。丘の南寄りの高台にあたる地点だ。

「日島神社だ。それと今通ってきた児童公園のわきは泉福寺という寺になっている。神社に宮司はいないが、泉福寺には住職がいる。それ以外だと、映画館、麻雀荘、弓道場、ビリヤード場、スナック、老人クラブもある」

私は地図を見つめた。この島の地理に早く慣れるためには、地図を手帳に写しとり、実際に自分の足で歩いてみる他はない。

「賭博行為等は？」

「あるかもしれない。自宅や寮で、賭け麻雀や花札賭博をやっているという話もちらほら聞こえてくる。が、そこに踏みこむ必要まではないと私は思っている。ここに暴力団はいない。もちろん刺青をしょっておったり、指をつめていような者がおらんとはいわんが、この島にきた時点で、過去には

清算をつけている、と考えているよ。炭鉱の仕事をせずに、この島で暮らしていくことはできない。我々や教師などを別にすれば、ここで生活する者は、必ず何らかの形で日島炭鉱とかかわっている。無為徒食の輩やからなど、ひとりもおらん」

きつぱりと岩本巡査はいった。
「でも下請け労働者はどうなのでしょう。流れ者や食いつめてここにやってくる人間もいるのではありませんか」

「確かに下請けの者の中には、気になる風体の人間もいるが、数の上では鉱員や社員のほうがはるかに多い。気の荒さという点でも、チンピラやくざなどより、毎日、生死を賭してヤマに入っている鉱員のほうがはるかに上だ。その鉱員が規律正しい生活をしている以上、流れ者の下請けが大きな顔などできんだらう。下請けは、M菱に委託されたT組という会社が入れている。下請け労働者が問題を起せば、M菱はT組の責任を問う。T組はT組で、下請けの管理に目を光らせる、というわけだ。何しろ、悪さしてもどこかへ逃げだすことができん場所におつとやから」

すべてはそこに尽きる。岩本巡査はそう、いったげだった。

地図には、島の大きさが書きこまれている。南北「四百八十米」、東西「百六十米」とあった。町歩でいえば、七町あるかどうかという大きさだ。歩き回れば、あつというまに一周できてしまう。

「とにかく歩いてみることにたい」

私のその考えが伝わったように岩本巡査はいった。

「制服でうろろろするより、今のままの格好がいいだろう。制服姿で道に迷ったら、笑い者になる」
その通りだ。

「よろしいんですか」

「ああ、大丈夫だ」

いつて岩本巡査は、警察電話の上の壁にかけられた時計を見た。

「昼までまだ二時間近くある。それだけあれば、あちこち見て回れるだろう。昼になったら、私が食堂に案内するよ」

「食堂があるんですね」

私はほつとした。署の寮にいたときとちがいで、食事は自炊しなければならないだろうと思っていたのだ。

「鉱員の多くは弁当をもってヤマに入るが、独身者はそうもいかない。食堂は三方所あって角打ちもできる。ヤマは二十四時間操業しているから、どの時間でも誰かしら働いていて、誰かしらが勤務明け、誰かしらが寝ている、というわけだ」

「二十四時間、休みなしですか」

岩本巡査は頷いた。

「一番方が朝八時から午後四時まで。二番方が四時から夜中の十二時まで。三番方が十二時から朝の八時までだ。そうやって働いているから、真面目な鉱員の家は裕福だ。テレビ受像機など、本土よりもはるかに多くの家にある。電気洗濯機や電気冷蔵庫も、皆もっている」

私は驚いた。鉱員は貧しいという思いこみがあったのだ。

「戦前は、まったくちがう状況だったらしい。働いても働いても飯代や酒代、家賃をとられて、むしろ借金がかさむ『鬼が島』だといわれていたそうだ。逃げようと海にとびこみ、溺れ死んだ者も数多くいたというな。まあ、そんな時代だったら、我々の仕事はもつともつとたいへんだ。明治の頃は、殺人もあつたというし。やはり豊かになると、すべてが変化するとじゃろうな」

確かにその通りなのだろう。飯場に押しこみ強制労働をさせるのと、家族とともに狭いながらも我が家を与えられて、そのために働こうというのでは、どちらが効率があがるのか、考えるまでもない

話だ。

敗戦のとき私は十歳だった。その私ですら、昭和も三十年代に入ってから、世の中がかわってきたことを実感していた。N市にピカドンが落ちたとき、幸いなことに私は熊本に疎開していて、難を免れた。親戚にはピカドンで亡くなった者が何人かいる。

当時は、何とむごいことをするのかとアメリカを憎んだ。しかし、敗戦がこの国の民衆ひとりひとりに、幸福を考える空気をもちこんだことは、まぎれもない事実だった。

私は手帳に簡単な島の地図を写しとった。歩き回りながら気づいたことを書きこむつもりだ。私が写しとるのを、岩本巡査は黙って見つめている。

あらかた地図を写しとったとき、派出所の扉がかりりと開かれた。丸顔で眼鏡をかけた三十くらいの女が立っていた。

「もういらしたのね」

女は私を見て、岩本巡査に告げた。手に風呂敷包みを提げている。

「ああ。荒巻巡査、家内の千枝子だ」

セーターにスカート、素足で下駄をはいている。

「初めまして。本日着任した荒巻です」

私は敬礼した。岩本巡査の夫人、千枝子はくすりと笑った。

「よろしくお願いします。お弁当、荒巻さんのぶんも用意しました。おむすびですけど」

「いやあ、それはありがとうございます」

私は思わず声をあげた。

「よう気のついたな」

岩本巡査は夫人を見やった。

「独身の方だと聞いてとりましたもんで」

「ありがたくちょうだいします」

私は夫人に頭を下げた。

「そんな困苦しくなさらずで下さい。これから主人のことをよろしくお願いいたします」

夫人はいった。

「こちらこそ、新参者ですがよろしく願います」

私はあわててもう一度敬礼した。やさしげな夫人でよかった、と思った。

「では、いつてまいります」

派出所をでた私は右手、島の北側に向かった。同じ船でやってきたかつぎ屋の婦人たちが露店を広げているのが見えた。なかなかにぎやかで、そのさまは、呼子の朝市をふと思いださせた。かついできた大きなカゴの中に、新鮮な野菜や干物、ちよつとした日用品などを並べている。

中にはたらいに入れた金魚や小鳥を売っている者もいた。買い物カゴを手にし、前かけを下げた主婦たちが、露店の前でしゃがみ、売りものを吟味している。

そのようすだけを見れば、ここが特殊な環境の島であることを忘れてしまえそうだ。

並んでいる露店の正面に「厚生食堂」という看板が掲げられていた。(一般食堂)とあり、「トーフ、パン、製造販売」と横に記されている。自家製の豆腐やパンまであるのかと、私は感心した。これなら、食事の苦勞はしないですみそう。

さらに進むと右手の奥に急峻な階段が見えた。建物と建物のあいだにはさまれ、いき止まりかと思われたような場所に階段は存在していて、岩の丘と下界を結んでいるようだ。

私は階段を登った。急勾配の上に折れ曲がっていて、これを毎日登り降りしなければならぬ住人はたいへんだろう。

地図によると、この階段の下に、島内の商店が集まっているようだ。「H島銀座」と記されている。階段をあがっていくと櫛の歯のように並んだ九階建ての鉱員住宅が四棟つながっているのがわかった。狭いすきまからは、岩の丘の中腹に沿ってこの建物が作られたことがうかがえた。そこからはむきだし你的生活空間が見える。洗濯物も家の中も丸見えだ。建物と建物のあいだには、まるでつつかえ棒のようにコンクリートの横梁が渡されていた。おそらくこれがなければ、急傾斜に沿ってある建物の安定が保てないのだ。

この階段に立って眺めるだけで、小さな島で人が身を寄せあつて生きることのたいへんさをつくづく感じた。

この地では、いさかいをいさかいのままほっておくことはできないだろう。小さな怒りも放置すれば、大きな憎しみにかわりかねない。人は互いの感情を大切にすることを自然に学ぶ。

岩の丘の上にとると、社が見えた。H島神社だ。コンクリートの橋脚の上に、社と参道となる通路がのっている。

この狭いところによく神社を作ったものだと感じ、いや順序が逆だったのかもしれないと思ひ直した。海上の島とその地下に掘られた炭鉱という、この地の環境を考えると、まず人々は安全を願う依代として、島の最も高台に神社を建立したのだ。住宅は、そのあとから増殖していったにちがいない。私は今日から住人になる者のつとめとして、神社に参拝することにした。賽銭を投げ、拍手を打った。拝殿からは島のかんりの範囲が見渡せる。

そのせいも、人の姿も多い。日当たりもよく、風が抜けるので、自然に集まってくるのだろう。背広姿の私に、多くの視線が注がれるのを感じた。

島の東半分、鉱山施設がよく見渡せた。ベルトコンベアが唸りをあげ、石炭を運びあげている。

その手前には水をたたえた巨大な円形のプールが見えた。それが選炭に使われる、ドルシクナーという施設であることは、他の炭鉱を訪れたときの経験で知っていた。

ドルシクナーの右手には、巻き揚げ機の櫓がそびえている。それを目にする、自分の足もとの地下深くで、今この瞬間も、鉱員たちが過酷な作業に従事しているのを感じずにはいられなかった。

蟬集した生活空間は、あくまでも炭鉱の付属物なのだ。我が国の産業を支える、重要な動力源が、この島の地下深くで掘りだされている。石炭は電気を起こし、鉄を作り、汽車を走らせる。すべての産業の源なのだ。

であるからこそ、ここに五千人からの人が住む集落ができあがった。

写しとった地図には、島の東半分は、大きく「鉱場」と記されていた。鉱場が、島の主役なのだ。鉱場で働き、鉱場を運営する人々と、それを支える人々でこの島は成りたっている。

そう思うと、自分がひどく心細くなった。警察官という仕事など、この島の事業に何ひとつ寄与できないのではないか。いつてみれば、お荷物に過ぎない。

岩本巡査の言葉によれば島内で発生するもめごとの大半は、住民どうしによって解決されてしまひ、さらに外勤という生活指導係がいる以上、ほとんど警察官の出番はないという。

にもかかわらず、住民が分けあう貴重な空間に居すわる警察官は、むしろ邪魔なだけではないのか。私は参道の、コンクリートでできた手すりによりかかり、島を見おろした。また下には変電設備や坑道から空気を排出するための風道、豎坑の入り口があり、私が上陸したのとは異なる船着場に面してクレーンがそびえている。

クレーンは島の東部のあちこちにあつた。

クレーンとベルトコンベアが、掘りだされた石炭を集め、選り分け、そしてまた山として、船に積

みこんでいるのだ。

その作業は、海が荒れない限り、毎日のようにつづくのだろう。

巨大な機械の稼働を目の当たりにしながら、運ばれる石炭が人の手で掘りだされているのだと思うと、それはまさに気が遠くなるような努力の集積なのだと感じずにはいられなかった。

粉塵の舞う、暗黒の坑道の中で、死と隣り合わせに石炭を掘りつづける作業とは、どれほど過酷なものか。一日の作業が終われば、疲れを癒やそうと酒に手がのびるのは当然だろう。その結果、喧嘩が起こったとしても、いちいち目くじらをたてるのは、大人げないことかもしれない。

ふりかえると、島の西側は、密集した建物ばかりだ。ほとんどの屋内には日がささず、風通しも悪い。にもかかわらず、五千人からの人が身を寄せ合い、暮らしている。生活に必要な、さまざまな補助を鉱山会社が提供するからこそ、人は暮らしていける。

裕福なのは、そうでなければ、ここで暮らしたいなどと誰も思わないからだ。ここで生活する限り、空間の限界という我慢を、誰であろうと強いられる。大声をだせば筒抜けで、秘密を守ることは難しく、どこで何をしようと、他人の目を避けるのは不可能に近い。うつぶんのはげぐちは、どこにあるのだろうか。

運動をしようにも、ふさわしい空間はほとんどない。

日曜日には、このH島から多くの人がN市に船でかけていくのを私は知っていた。島内では買えない衣服や本、レコードなどをN市で入手するのが目的だ。

だがここに立って見るとわかる。彼らが週に一度島を離れるのは、単に購買意欲を満たすだけが目的なのではない。数時間だろうと、人の目を気にしない、知らぬ者ばかりの地に降りたつ解放感を味わいたいからにちがいないのだ。

私もそうなるのだろうか。

島に慣れるまでは、非番の日といえども、なるべく多くの時間を島内で過ごすべきだと思った。地理を知り、仕事や生活の習慣に馴染まなければならぬ。

そうでなくては、ここでの仕事と暮らしは厳しいものになる。

神社を離れ、丘の上を南に進んだ。ふもととはちがい、三階、四階といった低いコンクリート製の住宅がせまい範囲に、横に並んでいる。鉱山会社の社員用の住宅だった。二棟並んだ住宅の向こうには、木造の二階屋があった。

コンクリート製の共同住宅ではない一軒家は、この島では新鮮だった。ここが鉱長、すなわち、島の最上位に君臨する人の住居なのだ。

まさに一目瞭然、誰の目からも特権が与えられていると知れる住宅だった。

その先、一段低くなったところには、木造の社員住宅が二棟並び、その南側に貯水槽があった。

私は丘の上をぐるりと歩き回ると、再び下界へと降りた。島の北側の端には病院があった。結核や腸チフスなど伝染病患者を収容するための隔離病棟も、病院の西側、海ぎりぎりのところにたっている。

ほっとしたこと東側の端には運動場があった。それに面して、六階建ての学校がある。

小学校と中学校が、ひとつの建物の中におさまっているのだ。

運動場の入り口に立ち、校舎を見上げていると、チャイムが鳴った。そのとたん、おびたしい数の児童、生徒がいっせいに校舎の出入り口からあふれだし、私はびっくりした。子供たちは住宅地帯である、島の南側にてんで走っていく。

時計をのぞき、昼なのだと気づいた。

この島では、職場だけではなく、学校もまた住居に近接している。したがって子供たちは、昼食を家でとるために、帰宅するのだろうか。

六階建ての小中学校など、おそらく日本中のどこにも存在しない。彼らが大人になってこの島をでていったとき、学校での思い出は、他のいかなる土地で育った子供とも異なると気づくにちがいがなかった。

学校の横、東側は、すぐ海だった。そこに護岸からせりだしたようなでっぱりがあった。男たちが何人かそのでっぱりにしゃがみ、竿を使わず、直接釣り糸を海にたらしめている。釣りのための場所なのだろうかと考え、「船着場」と記された看板に、それを改めた。

私が上陸した栈橋に比べると海からの高さがあつて、およそ使い勝手が悪そうだ。あの栈橋ができたことで使われなくなったのだろうか。

見ていると、ひとりの釣り人が釣り糸をたぐり上げた。

上がってきたのは、丸味を帯びた形をした、掌ほどの青黒い魚だった。もち帰つて食べるのか、釣り人はそれをかたわらのバケツに入れ、再び釣り糸を海にたらしした。

そこから南側は、鉱場の区画だ。変電所や倉庫、ベルトコンベアなどの施設に、精炭が見える。

私はようやくこの島の全体像がつかめたような気がした。南北に長い島の、ほぼ中心部にある細長い岩の丘が東西に島を二分している。丘の東側が、鉱場地帯、西側が住宅地帯というわけだ。

写してきた地図によると、北側の端には病院が、南側の端には水泳プールがあるようだ。

四方を海に囲まれているのに水泳プールがあるというのは、奇妙な話だった。が、考えてみれば、海流の速い島の周辺は、子供の水泳に適しているとはいえない。あれだけの数の子供たちが暮らすかには、彼らのための水泳場が必要になる。

私は鉱場地帯を、海沿いに進んでみることにした。西側に比べると建物の数は少ないが、積み上げられた資材や石炭が、大きく場所をとっている。坑道を支えるための木材の山は、三階建ての鉱山事務所の屋根より高かった。

私は足を止めた。クレーンが巨大な首を振り、そびえたつ捲き揚げ機の櫓が、ウインチの音を響かせ、ベルトコンベアは間断なく石炭を運びつづけている。

まさに生産の現場だった。思わず見とれていると、

「あんた！」

いきなり鋭い声をかけられ、ふりかえった。

陽焼けた法被姿の男が立っていた。手に軍手をはめ、白いヘルメットをかぶっている。

「会社の人かね」

また、例の外勤係かと思つたが、腕章をはめていないところを見ると、鉱場で働く人のようだ。

「いえ。自分は、今日着任したばかりの派出所警官です。この島の地理に慣れようと、歩いてきたところです」

まるで上官に対するような敬語になっていた。誰何されるたびに、しばらくはこう答えるしかないのだろう、といいながら思つたことだった。

「おお、後藤さんの後釜かね」

男は頬をほころばせた。前任者が、後藤巡查といったことを、私は思いだした。

「その通りです」

「それはそれは、ご苦労さんです。私は小宮山こみやまといいます。その総合事務所におつたところ、背広姿の見かけん人がうろろしておつたものだから、何だろうと思つて、きてみたんです」

「それは失礼しました」

「いやいや。そういうことなら、このあたりをご案内しましょう」

小宮山はいつて、私の返事を聞かず、歩きだした。

「小宮山さんは鉱山で働いておられるのですか」

私は肩を並べ、訊ねた。

「いや、私はT組の労務管理をやっております。組夫頭ですわ」

ついさつき、岩本巡査との話題にのぼった、下請けのT組の人間と聞き、私は驚いた。

「組夫というのは、どんな仕事をされているんですか？」

「ヤマで石炭掘るのが鉦員ですわな。じゃ、資材を荷揚げしたり、コンベアやクレーン動かしたり、ああいっ坑木を運んだりするのは、誰がやるか。組夫です」

小宮山が指さしたのは、屋根より高く積まれた木材の山だ。

「組夫はヤマには入れません。ですが、組夫がおらんければ、できん仕事はたくさんあります」

小宮山はずんぐりとした体つきで、猛犬のように頑丈そうな顎あごをしていた。ぼつりとした瞼まぶたの下目は小さいが、妙に鋭い光を放っている。制服にヘルメットといういでたちでなく街場にいれば、まぢがいなく筋者だと思つたろう。

労務管理をしているといったが、この男の背中に刺青いれずみが入っていても驚かない。

「組夫の人には独身者が多いとですか」

「お巡りさんはきたばかりで知らんでしょうが、ここは人の住める場所が限られとります。所帯者は、女房、子供がついてくる。社員や鉦員はそれでもいいでしょうが、組夫の住むところにそんな余裕はありませんよ」

「なるほど」

「組夫は、おつて五年。たいていは二年から三年で辞めていきます。金が欲しくて島にくる、というのがほとんどですけん」

「組夫から鉦員になる人もいるのですか」

「おらんわけじゃありませんが、そんなときは組じゃなくて、M菱との契約になります。組夫の者が採

炭するのは、法律で禁じられとりますけん」

答えながら小宮山は捲き揚げ櫓のかたわらを歩いていった。

「この先の建物が会社事務所と総合事務所です。鉦員はヤマから上がってくるなり、櫓の下の風呂に入つて炭塵たんじんを落とすんですわ。風呂に入るときはほつとするでしょうな」

「M菱鉦業株式会社 T島鉦業所H島鉦」

と書かれた板が、会社事務所の入り口にかかっていた。

「外来者は必ず受付に御立寄り下さい」との木札が立っている。

左手を見ると、海につきでたクレーンが、運搬船から坑木を吊り上げているところだった。

「あれは十五トンクレーンです。あのクレーンを動かしておるのも組夫の人間です。そのこつち側が、第二豎坑の櫓です。豎坑の深さは、六百三十六メートルあるとです」

近くで見るとベルトコンベアの支柱はすべて石炭に埋もれていた。

いかに大量の石炭が足下から掘りだされているのかを示している。こんなに多くの石炭を掘りだしては、島が沈下してしまうのではないかと、私は素人考えにかられた。

鉱場の、建物がないところには、すべてといつてよいくらい石炭が積みあげられている。

「掘つても掘つても、ああして、積込船が石炭をもつていきます。積込棧橋のクレーンは、デイスクリビュータといいましてな、前後左右に動いて、船の上に片寄りがでんように上手にならして石炭を積みこむんです」

小宮山が説明した。そして事務所のほうを指さした。

「この奥に繰込所があります。繰込所というのは、ヤマに入る前に鉦員がそろつて点呼をしたりする待機所ですな。そのあと豎坑口の階段を降りて、ヤマに入っていくわけです」

「小宮山さんは鉦員をしておられたことがあるとですか」

下請けの労務管理にしては、鉱山の事情に詳しい。

小宮山は何ともいえない表情を浮かべた。

「十代の頃ですがね。戦争が激しくなつて軍隊にとられるまでのいつとき、ここにおつたことがあります。今とは比べものにならないくらい労務管理はいばつとりました。今は一日三交代ですが、当時は二交代で、ノソソボをすると、ベルトでぶん殴られたとです。軍隊から戻ってきてしばらくは、小倉のほうで悪さをしとつたんですが、そろそろまっとうにならなやと思ひましてね。おつた組の代貸しの紹介で、T組に入ったんですわ」

「よく足を洗えましたね」

私がいとうと、小宮山は左手の軍手を外した。左手の小指の第二関節から先がなかった。

「こんなもんで許してくれました」

「すぐさままた、軍手をはめた。私が警察官だというので、見せたのだろう。」

「組夫にも気の荒い人は多いのでしようね」

私は探りを入れてみた。

「気が荒いのもおりますが、もつとわからんとは、本当は力仕事なんかやらんでもええような、賢そうな奴がおることです。学歴もあるとやろうに、なんでこげな島に流れてきたとかいな、と思うようなのが、ときどきおります。まあ、それなりの事情があつてのことでしょうが」

小宮山はいった。

「問題さえ起こさなけりや、組としてはかまわん、ということですよ」

どこかよその土地で犯罪をして、逃げのびてきた者かもしれない。この島は外来者には厳しいが、一度入りこんでしまえば、外から自分を捕まえにくる者はまずいないと安心できる。

「問題は起きないのですか」

「喧嘩くらいはしょつちゅうあります。組夫つちゅうのは、この島じゃ一番下です。一日中、陽がささん穴倉みたいなところに何人も押しこめられとるわけですから、そりやあ若いのなんかは、何かあつたらすぐ弾けます。鉱員との折り合いが悪いのもおるし」

「今いわれた、過去を隠しているような者も、ですか」

「いや、そういう連中は、むしろおとなしくしちよります。休みの日も、ふつうは船でN市に行くんだが、じつと寮の中に閉じこもつて、でかけようとせん。ただね、凶状もちは、組夫とは限らんです。」

鉱員の中にも、そういうのはおります」

私は頷いた。そのような人物を発見したら、自分はどうすべきだろう。もちろん、逃亡中の犯罪者を見逃すことなどできない。とはいえ、下請け労働者や鉱員の宿舎を、やたらに嗅ぎ回つていけば、嫌われ、遠ざけられるのは火を見るより明らかだ。民主警察の一員として、そのような行為は慎むべきだ。

小宮山と私は、つい先ほど上陸に使つた棧橋の前まできていた。

「これはドルフィン棧橋といましてな。二代目なんです。初代は、三年前の台風で流されちまいました。そうなると、人間は向こうの船着場を使わなきゃならん。潮が落つこつとるときは、女、子供でも縄バシゴを伝つてのあがり降りです。しかも手がすべつたら、海に落ちる。そりやあたひへんなもんでした」

海上に、あずまやのように存在するドルフィン棧橋は、少なくとも島からの渡し板をかけられるだけ、縄バシゴでのあがり降りが必要としないのだろうか。

「台風の被害はよくあるのですか」

小宮山はにやりと笑つた。

「お巡りさんも夏になつたらわかる。ここは本土とはちがいますけんね。台風がきたら、島全部が沈

むんじやなかるうかというくらい波が打ちよせる。三年前は、たてつづけにふたつ台風がきた。八月の九号が、棧橋を壊し、31号棟のところにあった商店街をあらかた流しちまった。その復旧もすまない九月に十二号がきましてね、その護岸がまるで砲撃でもくらったみたいに、そっくり崩れちまった。おとしも、つづけてふたつ台風がきて、電話はつながらなくなるわ、波が30号棟の上からおつかぶってくるわ、でね」

30号棟というのは、トンネルをでたところにあつた、古い七階建てのアパートだ。私は仰天した。「あのアパートの上を、波が越すのですか」

「ええ。あんときは本当に、島じゅう水びたしになりましたわ。そうなりやもろろん、船はまるで近寄れん。台風がいつちまったあとも、海がシケてりや、接岸できん。この島の者は雪隠詰めたい」

小宮山は愉快そうにいった。そしてつけ加えた。

「そうだ、派出所をでて、地獄段を登つてこられたでしょう」

「地獄段というのは、神社につながっている曲がりくねった階段のことですか」

「そうそう。あの先、65号棟と66号棟のあいだなんかを、潮降り街と呼んどるとです。あのあたりの地下には購買所もあつて、人もよく通るんだが、ちょうど西の端つこにありますけんね。海が荒れると、護岸にあつた波のしぶきが、まるで雨みたいに降ってくる。子供らなんか見ると、うまいもんですよ。頃合いをはかつて、一気に走り抜けたりしとりますからね。お巡りさんも一張羅を着ているときは、気をつけたほうがいい」

地獄段に潮降り街。私は新たに知った言葉を手帳に書きとめた。

「いろいろありがとうございます」

じき昼になる。腕時計を見て、私は頭を下げた。

「いやいや。お巡りさんも、すぐにわかると思いますがね。ここは、人どちがうことをやっておつた

ら、生きにくい土地です。あまり無理をせんことです」

笑いながら、小宮山はいったが、その目は笑つてはいなかつた。新米の警官は、よけいなことに鼻をつっこむな、と警告しているようにすら、私には聞こえたものだ。

派出所に戻ると、岩本巡査が昼の仕度をして待っていた。仕度といつても、わかした湯で茶をいれただけのことだが、外を歩き回つてすっかり冷えた体にはありがたかつた。

「どうだつたね」

背広から制服に着がえ、椅子についた私に岩本巡査は訊ねた。

「いや、聞きしにまさるところです。こげん建物と建物が密接しているとは思いませんでした」

「地獄段を登つてみたかい」

「その階段ですね。途中から、アパートの中が丸見えで驚きました」

馴染んだ制服を着たことで、私は少し気持ち落ちつくのを感じた。腰に吊るした警棒や拳銃の重みにほっとする。

「そう。ここでは、個人の秘密を守るのは非常に難しい。どこにいつても誰かの目があり、何をしていたか、誰といたかが知れわたる。それは、我々も同じだ」

「そういえば、鉱場でT組の労務管理をやっているという人に声をかけられました」

「小宮山さんか」

私は頷いた。

「なかなか癖のありそうな人ですね。若い頃は無茶をしたようなこともいつていましたか」

「極道あがりだな。背中に金太郎の刺青を背負っていることから、皆からは『金太郎』と呼ばれておるよ」

「刺青を入れている者は多いのですか」

「多いね。まあ、食べなさい」

経木で包まれた握り飯が机にはおかれていた。

「は、ありがたくちようだいします」

包みを開け、私はふたつある握り飯のひとつを頬ばった。黄色いタクアンが二切れ、添えられていた。

「ここでは、よほどのことがない限り、他人の過去は詮索しない。たまたまこの島におる者など、決して多くはない」

「確かにいわれる通りかもしれません。ここは本土とはまるでちがう、人とのつきあいかたを強いられるでしょう。とはいえ、犯罪の報告があれば、職務として、厳正に対処しないと」

岩本巡査はふっと笑った。

「その通りばってん、ここに犯罪の報告など、よほどのことがない限り、届かない」

「外勤係で処理される、と?」

「警官がでていけば、それは公式の対処になる。たとえ下請けや鉱員の起こしたもめごとであっても、最終的には鉱長まで報告がいく。そうなれば、誰かしらが責任を負わなければならぬ。この島を逐おわれることになれば、生活の場も、手段も、すべて失う。つまりすぐにでも路頭に迷ってしまう。そんな人間を生みだしたくはなかじやろう」

私は黙っていた。岩本巡査のいうことはわかった。が、それはどこか、犯罪を見ても、見ぬフリをしろといっているようにも聞こえ、違和感があった。

しかし着任早々で、土地のことを何も知らない新米が抗弁するのはためらわれた。

「とにかく、一度歩き回ったくらいでは、この島のことを知るのとは不可能だ。慣れるにはしばらくかかる」

「はい」

握り飯を食べ終わると、私は頭を下げた。

「ごちそうさまでした。奥さまにもよろしくお伝え下さい」

「いやいや、お粗末さま」

岩本巡査は笑って首をふった。

「家内はね、この島の子供たちのために書道教室をやっているんだ。公務員の嫁だから月謝をとらせるわけにはいかん。そこで生徒の親が、米やら野菜やらをもってきてくれる。どれもこの島でとれるわけではないが、会社の補助をうけている商店では、本土より安く買える。おかげでうちは、食事は困らない。何やつたら、毎日、君のぶんの弁当も用意させよう。そうだ、そいがよか。どうせひとり前作のもの、ふたり前作のもの同じような手間だ」

いや、それは——といいかけた私の言葉を岩本巡査は押し切った。

こうして昼食の悩みからは解放されることになったが、岩本巡査の言葉に抱いた違和感を、その午後、私はずっと胸に抱えていた。

午後四時、全島に響き渡るサイレンが鳴り、私は、読んでいた日勤簿から、はっと顔を上げた。

「一日二度、鳴る。八時と四時だ。これ以外にサイレンが鳴ったら、ヤマで事故があったか、火事が起きたかのどちらかだ」

岩本巡査がいった。

「そうですか」

私はほっと息を吐いた。これまでの日勤簿を見る限り、この数カ月、島内で大きな事件、事故は発生していない。

「ヤマで最も恐いのは事故だ」

「落盤ですか」

「いや、ガスだそうだ。炭田の中には、高圧のガスがたまっているところがあって、掘っているうちにそれにつきあたると、すさまじい勢いでガスが細かな石炭を伴って噴出するらしい。それがあつというまに坑道を塞いでしまうというんだ。昭和二十六年に起こったガス突出では、五人が死んだ。鉱員が死ぬと、その家族はこの島では生活していけないことなる。病死した鉱員の家族が引越していくのを見たことがあるが、憐れなもんやつた」

この島がひとつの“町”であるとしても、鉱山会社の所有である以上、その職に携わっていない者に、暮らす場は与えられないということなのだ。

「寂しいですね。一家の大黒柱を失った上に、その土地をでていかなければならない」

岩本巡査は頷いた。

「一家がその後どうなったのか、考えると、心痛むものがある」

それだけ厳しい“決まり”がこの島にはある、と岩本巡査はいいたいのだろう。

「次に恐いのは、やはり火事ですか」

これだけ建物が密集しているのだ。いかにコンクリート造りばかりとはいえ、延焼は免れられない。

「そうだな。おとし、私が着任する少し前に大きな火災があったそうだ。当時木造だった小学校の校舎から火がでて、校舎すべてと隣接する65号棟の一部を焼き、死者一名がでた。以来、防火には神経を尖らせている」

私は頷いた。

「そして、避けられないのが台風だ。こればかりはどうにもならない。波が建物の上から落ちてくるのを初めて見たときは、私も肝を潰した」

「さつき、小宮山さんもいっていました。30号棟の上から波が落ちてきた、と」

「本土や他の島とちがって、ここには浜というものが無いからな。波が打ちつければ、それはすぐに建物にかかってくる」

「もともとはもつと小さな島だったのを、埋めたてて大きくしたと聞きました」

「その通りだ。埋めたては、私の聞くところでは、明治三十年に始まって、昭和六年まで六度、おこなわれたそうさ。最初はここは、島といっても、海上に岩が隆起した、岩礁のようなものだったらしい。大きさも、南北が三百メートルと少し、東西が百二十メートルというから、今よりひと回り以上小さかったのだな。それを掘りあげた岩などで埋めたて、広げていった。初めは、手前のT島のほうが石炭がとれていたのが、こちらのほうが埋蔵量も多いというのがわかって、人が多く住み、さらにそれによって島が拡張されるというくり返したようさだ。だが台風がくるたびに、風波が島の表面にある建物を削っていくので、先人は苦労しただろう。私が着任直後の、おとし八月にきた七号台風は、島を水びたしにしたが、実質的な被害はあまりなかった」

「私が今日渡ってきた栈橋の土台も流されたことがあるとか」

「昭和三十一年の九号台風のことだろう。その被害はひどかったそうさだ」

「台風がきたら、閉じこもるだけですか」

岩本巡査は頷いた。

「護岸にはあぶなくて近づけんからね。だが高台に避難して波を見物する人もけっこういた」

それほどの波は、私も見た経験がなかった。

熊本の疎開先は山の中で、台風がやってきても、せいぜい大風が吹くくらいだった。不謹慎かもしれないが、建物の屋根を越えるほどの波が打ちつけるのを、一度この目で見たい、と思った。

「いずれにせよ、火事や波による被害を防ぐために、外勤係の人たちは、一日中、島内を見回っている」

「すると警邏活動はないのですか」

「通常は、我々は交代でここに詰める。夜間は、奥の仮眠室におつてもかまわない。通報があったときに対応すればよい」

「すると今日は——」

「疲れているだろうから、今日の夜勤は、私がしよう」

「いや、それは申しわけなかつた。私が」

岩本巡査は、笑つて首をふつた。
「まだ君は、寮にいつていないだろう。今夜から寝ぐらになる22号棟の人たちに挨拶もしなけりやならん」

いわれてはつとした。その通りだ。

「22号棟は六年前にできたばかりの新しい建物だ。といっても、島には今、次から次に新しい建物が増えていく。人口が増えているから、会社もそれに対応するために、盛んに建設を進めているわけだ。その先にある小中学校の校舎や病院は、皆、去年建つたばかりだ」

確かに新しい建物ばかりだった。

「地獄段をあがったのなら、山の上も見ただろう」

「ええ。鉱長のお宅も見ました。立派な一軒家でした」

「その手前に、新しい職員住宅が建つことになっている」

「職員というのは、社員のことですね」

「そうだ。島では社員と呼ばず、職員という。鉱場で採炭をするのが鉱員、下請けは、組夫と呼ぶのがふつうだ」

組夫という言葉は小宮山から聞いていた。

「山の上の南の端には、職員用のクラブハウスがある。ここには我々も入ることはできない。ときには本土から料理人が呼ばれて、鉱長や幹部職員のために腕をふるうこともあるようだ。クラブハウスに出入りできるのは、島では高い地位にある証明だ」

「鉱長というのは、どんな人です？」

「剣持さんといって、去年、ここにみえた。奥さんと二人の息子さんがいる。九州帝大で鉱物学を勉強されてから、M菱に入ったという話だ。『一島一家族』を標榜され、職員、鉱員ともに仲よく暮らし、働いていこうと、ことあるごとにおっしゃっている」

私は思わず笑つた。

「何か、おかしなことをいったかな」

「いえ。ただ岩本巡査がまるでM菱の社員のようにだったので」

「ん？ そうか」

岩本巡査は、困つたような顔をした。

「確かに少し、職員の影響をうけているかもしれない」

「それはしかたのないことだと思えます。この島で職務を遂行するには、島民である、職員、鉱員、組夫の考え方を理解しなければなりませんから」

私は覚えたばかりの言葉を交えていった。

岩本巡査は頷いた。

「その通りだ。しかし荒巻君は真面目だな。どうだろう、お互い巡査どうしなんだ。階級称は略さないか」

「岩本さん、とお呼びすればよろしいですか」

「私は荒巻君と呼ぶ。それでいいか」

「荒巻、でけっこうです」

岩本巡査はにこりと笑った。

「それはもつと親しくなつてから、だ。いずれにせよ、五千百人を数える島民の中では、二人しかない警察官だ。あとは公務員といつても、役場の出張所に勤める者ばかりだ。よろしく頼む」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

急にあたりが騒がしくなるのを感じて、私は派出所の外を見た。ジャンパーやカーデイガンにズボンをはいた男たちが数多く歩いている。彼らのはく下駄が、コンクリートの通路を鳴らしているのだ。「一番方があがつてきたんだ。鉦員はヤマをあがると、まず着のみ着のまま最初の風呂に入る。炭塵で耳の穴までまっ黒だからね。それから服を脱いで、もうひとつの風呂に漬かつて体をきれいにする。さっぱりしてからこうして家に帰ったり、食堂にくりこむわけだ」

岩本巡査の言葉通り、いずれの男たちも、湯あがりのござっぱりとした雰囲気を漂わせている。きつい作業を終え、ほっとしたのか、どの顔にも笑みがあった。

「家に帰った者も、たいていは酒盛りを始めるからな。あたりが賑やかなのは夕方だけじゃない。二番方があがつてくる真夜中過ぎ、三番方があがる朝の八時過ぎも同じだ」

「鉦員は何人いるのですか」

「約千四百人だ。職員が百三十人」

職員のはぼ十倍が、鉦員というわけだ。私はざっと計算した。鉦員、職員、あわせて千五百人強。

「去年一年に、この島で九十七名が出生し、死亡者は二十八名。七十七組が結婚し、七組が離婚した」私は驚いて岩本巡査をふりかえった。

岩本巡査はにやりとした。

「私だって、新任巡査の着任を前に、教えることを何も勉強していなかったわけではない。もつとい

おうか。小学校の児童数は約八百名、中学生は約二百三十名。教職員は両方あわせて三十人。島民の男女内訳は、男が二千九百、女が二千二百。これは登録されている者だから、渡りの組夫などを加えると、男はもう少し増えるかもしれない」

男の数が勝っているのはあるていど予想がついていた。

そうなると、当然、ある疑問がわいてくる。性犯罪の発生要因としても、男たちは欲望処理をどうしているのだろうか。同室に複数名が起居している状況では、自らで処理するののままならぬのではないか。

昨年施行された売春防止法で、赤線はいつせいに姿を消した。赤線とはもともと遊廓があった地帯を、戦後公娼制度に切りかわったときに、当局が地図上を赤い線で囲ったことに由来している。

赤線が消えたことで、強姦事件は増加した。昭和三十二年は四千百件だったものが、昨年、昭和三十三年は五千九百件、今年はさらに増えるとみられている。

「岩本さん、独り者の男たちはどうしているのでしょうか」

私は訊ねた。

「うん？」

岩本巡査は私を見返した。

「ご存じの通り、赤線廃止に伴い、性犯罪が急増しています。青線等の非公認の売春地帯もあります。が、取り締まり等もあり、赤線が営業していた頃のように、その種の欲望処理がおこなえていない状況です。うかがったところによると、島内には赤線はもちろん、青線もないようですが」

岩本巡査は私を見やり、深々と息を吸いこんだ。

「多くの独身者は、休日にはN市に渡って、そちらで処理をしているようだ。荒巻君も若いのだから、当然そういう気持ちもあるだろう。非番の日は、N市にいくといい。君は恋人はおらんのか」

私は首をふった。

「おりません。ですが私が知りたいのは、私自身の問題としてではなく、島内における性犯罪の発生要因に關係してのことです」

岩本巡査は私から目をそらした。

「性犯罪の通報は、ほとんどない。痴漢や出歯亀がまったくないわけではないだろうが、たとえば被害にあっても、島内での外聞を考え、泣き寝入りしている可能性はある」

「それは強姦事件であつてもですか」

岩本巡査は困つたような顔になつた。

「おそらくはそうだろう。ただ、君も見た通り、ここには人通りのない場所というのとはほとんどない。通りすがりの女を襲つて、意志を遂げるといったことはかなり難しい。もちろん屋内であれば、また別だろうが」

私は頷いた。確かにそうかもしれない。万一、犯行に及ぼうとして、それを誰かに見咎められでもしたら、逮捕以前に厳しい制裁をうける可能性がある。その上、逮捕されなくとも、島には住めなくなる。そこまでの危険を冒してまで性犯罪に及ぶ者は、決して多くはないだろう。

「わかりました」

「もちろん、どんな土地も、そうした変態や愚か者はいる。それを防ぐためにも、外勤係が巡回している」

結局は、島内における警察業務の一部は、鉱山会社の職員が代行しているのだ。私は失望すると同時に、いたしかたないことなのだろうと思つた。性犯罪も含め、五千人からの人口があつて、一日中稼働している炭鉱とその労働者及び家族が住む地域の防犯につとめようとするなら、とうてい二名の派出所警察官では対応できない。

と云つて、この小さな島に警察署や交番をおく余裕はない。住居用の空間すら限られているのだ。犯罪の発生件数が少ないのは、まさに島のこの特殊な状況が理由なのだ。

まずは人目が多い。狭い地域に多くの人間が住んでいる上に、誰もが寝静まる時間、というものがない。一番方、二番方、三番方と、二十四時間、炭鉱で働く者がいて、その家族もそれに合わせた生活をしているのだから、一日中、どこかの家で誰かが起きているわけだ。そうなると、侵入盗はかなり困難だ。

さらに流しの犯罪者は、島内には立ち入れない。私自身がそうされたように、見慣れぬ者の徘徊は、必ず誰何される。

逆にいえば、何らかの犯行に及んだ者は、その前後に目撃されるのを避けられない。

目撃されれば、どこの誰なのかをただちに特定される。逮捕は免れられない。

「この島で犯罪に及ぶのは難しい、というのがわかつてきたかね」

岩本巡査が、私の考えを見抜いたかのように訊ねた。

「ええ。ただ、泣き寝入りという可能性があるので気がなります」

答えると、岩本巡査は頷いた。

「それは私にも少しある。軽微な犯罪の場合はそういうことが起きているかもしれない。ただ、外勤係は、巡回以外にも夫婦喧嘩の仲裁など、あらゆる住民のもめごとに対応しているからね。万一、そういう匂いがすれば、我々の耳に必ず入れてくれると信じている」

そこまで信用していいものなのだろうか。島内の治安を預かる、という点では、確かに外勤係と警察官の目的は一致している。

しかし彼らはいくまでM菱の社員であつて公僕ではない。

たとえばの話、鉱山で高い地位にある職員やその家族が犯罪に關係している、という情報を得たと

きも、警察官に通報するだろうか。

あるいは、ヤマで働く者どうし強い連帯感をもった友人を、密告するような真似ができるとも思えない。仮にそういふことがあれば、密告したほうもされたほうも、この島に住めなくなるだろう。

不意にどこからか民謡のような歌声が聞こえてきた。それは派出所の上から降ってくる。

私が頭上をふり仰ぐと、岩本巡査がいった。

「にぎやかになるといつたろう。この派出所の上も鉱員の社宅だ。中で宴会を始めたのだろうよ」
厳しい労働から解放され、風呂に入って酒を飲めば、歌のひとつもでるのが当然だ、という口調だった。

歌声に呼応するように、今度は向かいの五階建てのアパートも騒がしくなった。地下に向かう階段をぞろぞろと人が降りていく。一階には、木造の店舗があり、そのうち二軒は酒屋らしく、店先で立ち飲みをしている者も多々いた。

酒屋の他に、電気屋と洋服屋が並んでいる。

「鉱員といつても酒が飲める者ばかりとは限らん。酒をやらん連中は、将棋や麻雀、玉突きで息抜きをしているようだ。もつとも鉱員は日給月給だからな。独り者の鉱員の中には、月に十日も働かないで、博打に明け暮れておるようなものもある。外勤係はそういうのを調べるのも仕事だ」

「金がなくなったら働くのですか」

私は岩本巡査をふりかえった。

「そうだが、給料は日払いのわけではない。だから質屋に行く」

「質屋まであるのですか」

驚いて私は訊き返した。

「この先の、櫛の歯のようになった日給社宅があるだろう。日給社宅というのは、日給で働く鉱員が

住んでいたから、そう呼ばれているんだが、その中にある洋品屋は、裏が質屋になっている」

16号棟から20号棟までの建物のようだ。このあたりではひとときわ古いアパートだ。櫛の歯のように見えるのは、五つの棟の西側、海側が通路の建物でつながっているからだ。

地図と見比べると、16号から19号が九階建てで、端の20号棟だけが六階建てだ。

前を歩くときに日当たりがひどく悪く、暗かったのを思い出した。

私は派出所の扉を開け、低い階段の上の踊り場に立った。

左手正面には映画館がある。「昭和館」という名の建物で、赤いレンガの柱が洒落た印象を与える。

なぜここに派出所がおかれたのか、ようやく私にもわかってきた。映画館に酒屋、食堂とくれば、このあたりがまさにこの小さな島の「盛り場」というわけだ。

ただ、書き写した地図によると、島内に唯一あるスナックと旅館は、派出所からだいぶ南よりの25号棟に入っているようだ。一階が「白水苑」というスナックで、二階が「清風荘」という旅館だった。

頭上から降ってくる歌声はますます大きくなっている。手拍子も混じり、実に楽しげだ。

何とも不思議な土地に着任したものだ、とつくづく思った。息苦しいほど小さな島なのに、決して辺地ではない。

むしろここは、都会とすらいえるほど、人家や商店が密集している。N市とちがい、大きな事件などは起こらないだろうが、田畑ばかりが管轄区域の署に勤務するよりは、はるかにさまざまなきごとく遭遇するような気がした。

高等学校卒業後、N県警察に採用され、二年間の警察学校教育ののち、巡査を拝命して四年がたった。

私が巡査となったのは、新警察法が公布、施行された昭和二十九年の翌年、三十年である。それまで国警N県警察隊と呼ばれていたのが、自治体警察と合併し、N県警察本部と名称がかわった。この

ことは何より「民主警察」の発足を意味していた。

二千五百名のN県警察官の一員として、私はこの仕事に身命を賭す覚悟だった。十四年前の原爆投下、さらには敗戦と、故郷N県、そして祖国日本は、痛めに痛めつけられてきた。が、この数年、めざましいほどの復興をあげつつある。

H島は、その復興を支える、重要な石炭の生産地なのだ。島で掘られた石炭の大半は、北九州の製鉄工場に運ばれるという。鉄こそ、復興の要である。

神社から島を見おろしたときに感じた心細さはいつのまにか消えていた。

むしろ並々ならぬ好奇心と、がんばらねばという闘志が、私の心を奮い立たせた。

傾いた日が、正面の48号棟の陰に隠れていく。日がかげると、コンクリートばかりの地面は、底冷えがした。周辺がすべて海というのもあるのだろう。

午後六時、私は住居となる22号棟に向かった。私にあてがわれた居室は、六畳と四畳半に台所と便所がついた部屋だった。この島で独身者に一部屋が与えられることはまずない、と聞いて、幸運に驚いた。

本来なら、H島小学校の教員と共同生活を送る予定であったのが、母親の看病のため、急きよ本土に戻ったのだという。

腹は減っていないかった。夜中でも腹が空けば厚生食堂がある。そう自分にいい聞かせ、少ない荷物をほごいた。

私の部屋は、三階の、階段をあがってすぐの位置にある。隣室は岩本巡査夫妻で、その向こうは役場の職員と家族が住んでいた。

一階が丁町役場H島支所なのだから、これほど職住接近もないだろう。

私は岩本巡査夫人に先ほどの握り飯の礼をいい、役場の職員一家にも引越しの挨拶をした。村内

といて、四十二、三ぐらいの、度の強い眼鏡をかけた人だ。小学生と思しい子供が室内に二人いた。

八時を過ぎると、あたりは静かになってきた。深夜まで歌って騒ぐような者は少ないようだ。

静かになると、今度は海鳴りが気になりだした。派出所内にいたときは意識していなかったが、まるで波が今いる建物に直接打ちつけてきているようだ。

実際は、22号棟と海とのあいだには、映画館の建物があるのだから、波の音はそれにさえぎられる筈だ。そう考え、昭和館が二階建てであったことを思い出した。

護岸に打ちつける波の音は、昭和館の屋根を越えて、こちら側に伝わってくるのだ。台風で海が荒れたときは、もっと恐ろしい音がするにちがいない。

スナック「白水苑」をのぞいてみようかと一瞬思ったが、着任直後の巡査が、私服とはいえ、飲みきたと思われるのは好ましいことではない。

また、暗い中をうろついて、島内で道に迷うのも不安だった。夜歩き回るのは、島の地理に精通しからず、と自分にいい聞かせた。

六畳間に布団をしき、腹ばいになって私は持参した文庫を広げた。N市内の古本屋で、十冊十円で買い求めたものだ。

海鳴りを聞きながら活字を追っているうちに、瞼が重くなるのを感じた。

明日は早起きして、出勤の前に、もう少し島内を歩いてみよう。

明かりを消し、目を閉じた。

暗い中でじっとしていると、海鳴り以外にもさまざまな物音が聞こえてくる。

子供たちの声、テレビ受像機から流れてくる流行歌、下の通りを歩く下駄の音は、建物と建物のあいだで反響し、うるさいほどだ。

この島では、革靴より下駄をはいている者がはるかに多い。鉦員は、ヤマに入るときはすべて着替

えるので、下駄ばきで移動することが多いのだろう。
明日は夜勤を申しよう。そう決心し、私は眠りに落ちていった。